
東方幻永伝 ~ End of the fragile dream ~

練炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想伝 End of the fragile dream

【Nコード】

N1217BA

【作者名】

練炭

【あらすじ】

それは一つの幻想の終わり——突然の楽園の崩壊。平穏であった幻想郷は一転して災禍の渦中となる。日常は脆くも崩れ去り、生きる者は生きるために動き出す。そして彼女達は選択を迫られる

東方キャラオールスター（星蓮船以前）で送る東方長編二次創作小説。今、幻想郷最後にして最大の異変が幕を開ける。以前某サイトで連載していた小説の加筆修正版です。そのサイトは削除しまし

たので悪しからず。

1：胎動〜beginning〜（前書き）

こちらはのろま更新ですが、どうぞお付き合い下さいませ。

1：胎動〜beginning

1：胎動〜beginning

閑かだった。それまでは――

暑くも無く寒くも無く、ただっ広い空には鱗雲が泳ぎ、頬を軽く撫でるような心地よい風が吹く――そんな或る秋の昼下がり。

平常、平和、そして普遍的な一日のコマ。平坦でありながらも、楽園を感じさせる“外”とは異なる空間――事実ここは『楽園』なのだ。

昨日のように過ぎ行く日々。そして明日も過ぎ行くであろう穏やかな日々。

誰もがそう疑わなかった。否、今までがそうであったため疑いようが無かった。

些細ないざこざが絶えないとは言いながらも、相対的に見れば恒久の平和が約束されているような、この幻想郷では。

絶対的調停者である巫女と、古今東西比類なき力を持つ大妖怪が統括するこの幻想郷では。

あらぬ心配は無用であった。

しかし、何の前触れも無く“それ”は起こった。

誰も気付かない内に、“それ”は静かに、発生した。

そして、着実に進行する。

いの一番に異変に気付いたのは、他でもない幻想郷の統括者、博麗神社の巫女、博麗霊夢だった。

博麗の巫女は代々幻想郷を司る存在として“世界”を監視し、それを覆う結界が正常に機能しているかを随時チェックしている。いつもだらけながら毎日を過ごしているように見えている霊夢だが、根底では“世界”を担う働きを、殆ど無意識の内にやっているのである。

さてその時、境内の掃除も一段落して、いつものように自然の音に耳を傾けながら霊夢は縁側で優雅に茶を嗜んでいた。

今日も平和に時間が過ぎていくことを享受しつつ。

そして今日も賽銭箱が寒々しいことを憂いつつ。

「……………」

ふと顔を上げて境内を見渡すが、思わず涙ぐんでしまう程に閑寂とした景色が広がっているだけであった。

無論賽銭箱が温かくなるような気配は微塵もしない。……悲しいかなそれがいつもの光景なのだが。

来るとしたら和菓子や酒やらを求めて集って来る某魔法使いやら某小鬼やら某スキマ妖怪くらいなものだ。迷惑千万なことこの上ない。こちらからもてなすことはあっても、向こうからの供物と言う名の差し入れは一切と言ってほくない。どう考えても不公平であっ

た。

「はあ……………」

ため息を一つ。

そしてこれでまた一つ幸運が逃げた、と更にマイナス方向へ思考が傾く始末である。と言うかもう振り切れてマイナスに突入している勢いだろう。

そもそも彼女の仕事は幻想郷の管理なのであり、その見返りとしてならず者達から賽銭を徴収しようだなんて考えが既にアレなのだが、彼女が本心からボランティア精神で奉仕活動を行う日はまだ当分来そうになかった。

そうしてうなだれた霊夢の目が、不気味な光を放ち始める。

（……………守矢んとこの神社のせいね……………近い内にまたカチコミする必要があるか……………）

ついに無駄に真剣な顔で華麗に責任転嫁＋危険思想を持ち出し始めたその時、

「……………ん？」

うつかり顔に出てしまっていた邪悪な表情を引っ込め、正気に戻る。

何となくふとした違和感を感じた霊夢は、茶碗を脇に置いておもむろに立ち上がった。

突如として現れた、微かな異常。

風も空気も空も地面も虫も小鳥も小動物も、その一瞬を境にしても何も変化は見受けられなかった。だが、何か明らかな異常を、霊

夢は持ち前の鋭敏な感覚で察知した。

殆ど第六感のようなものであるが、それが霊夢であるならば話は別である。霊夢の『何となく』は確定と同義だ。それが異変解決のエキスパートと呼ばれる所以の一つでもある。

霊夢は遙か遠くを見据えるように眉を顰め、

（この感じ——結界に綻び？ 極小さいみたいだけど……全く、また紫かしら？ この頃見ないと思ってたら……勝手にスキマ使って“外”に行き来するのは構わないけど、後始末くらいは自分できっちりしていきなさいよね……）

そう心の中でばやきつつ、そのままふらふらと飛び上がった。

結界の綻びと言えど、大きさにもよるが余程のものでない限り、大事に至るようなものではない。

流石に放っておけばえらいことになるのは当たり前だが、そんなになるまで気付かないということはまずありえない。そこまできたら“外”からの干渉の影響で、幻想郷自体がその形を保てなくなってしまうレベルである。

ともあれ、現場は幸いにもすぐ近くの魔法の森の中のようなであったので、ちゃっちゃと修復してお茶飲み直そう、といった軽い気持ちで出立した。こういったことは茶飯事とまではいかないが、極稀ということもない。いつものように、部分的に結界を少し強固に張り直せばいいだけの話だ。

そう。いつものことだ。何故か定期的に訪れる交戦必至の厄介な異変に比べたらまだよっぽどマシである。

流石にこの前神社が立て続けに二度もぶっ壊れた時は、もう運にも見放されたと思ったが……まあ、なるようになるもんである。

そう思いながら、霊夢は目的地へと接近する。

——だが、縁側に残されたお茶が、再び霊夢に飲まれることはなかった。

そして霊夢はまだ知らない。

紫が三日前から原因不明の眠りに就いたつきり、未だに意識が戻っていないことを。

異変は、着実に進行する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1217ba/>

東方幻永伝 ~ End of the fragile dream ~

2012年1月2日23時52分発行